

天地

ネットワーク テーブル 415号

発行：天地シニアネットワーク／2015・12・14

「目 次」

T E N T I ・ T O D A Y			2
会員の広場 「サイパン島陥落」（公平良三、Douglas Westfall 共著）			3
連載作品			3
旅行記	龍のコンサート三昧 2010－ (10) アムステルダムでの2つのコンサート	生部 圭助	3
旅行記	紺碧の空の下に＜オーストリア・クロアチア・スイス・スペイン＞ オーストリア (27) <リンク>を一周するオープンバスの階上から、ウィーン旧市街の名所旧跡を満喫しました (4) >	大竹 漠洲	7
天地 アーカイ ブス	江戸川柳で読む日本裏外史 (1)	高野 冬彦	10
	藤原定家と百人一首 一王朝文化への憧憬と無知		
	土佐南国市釣り紀行	魚山 釣太	16
講演会他	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		20
商品情報			21
事務局			22

美容と健康維持に「アルガンオイル」

モロッコ女性の自立を支援する＜アルガンオイル＞

アルガンオイルは「健康と美容に良い」ということで注目されています。

92m1 @1500円

会員特別価格です。商品は、ノンロースト・ローストの2タイプあります。ノンローストは、食用、化粧の両用、ローストは食用専用です。化粧用としては保湿効果が抜群で肌荒れ防止（踵のギザギザ防止などにも良い）、に効果があります。男性の方もどうぞお使いください。

第65回 新三木会・講演会のご案内

1. 日 時 平成27年12月17日(木) 13:00 如水会館2F スターホール
2. 演 題 『原子力発電、今後のエネルギーについて』
3. 講 師 柏木孝夫氏
東京工業大学特命教授、先進エネルギー国際研究センター長
4. 申 込 メール：shinsanmokukai@gmail.com
電話：047-464-4063(留守電有) 090-3813-0137
(フルネーム、卒年、所属を明示下さい)
会費：2千円、女性千円(但し如水会員は2千円)、学生無料
天地シニアでも申し込み出来ます

TENTI TODAY

公平良三さんから「サイパン島陥落」(公平良三、Douglas Westfall 共著)(2015年11月発行(有)エルムプランニング)という著書を天地シニアネットにご寄贈いただきました。公平さんは、アルガンオイル協会のメンバーですが、ビジネス経験豊富で現在は中小企業向けのコンサルタントとしてご活躍中です。本書は、昨年英語版で出版されたものを今回日本語版で出版されたとのことです、その内容は日米4人の兵士の証言と、負けて負けた21の敗因、今後同じ過ちを繰り返させないための提言となっています。

最近いままで黙っていた元兵士の方たちの証言が多く出てきました。安保法制の中に、また同じ道をたどるのではないかという不安を多くの方が感じるからでしょうか。公平さんの危惧を「会員の広場に」一部載せてありますのでご覧ください。

株式市場も手詰まりになってきたこともあります、消費税アップのもたつきも影響しているようです。消費税アップが不人気ですから、与党は軽減税率にすり替えて茶番劇をやっているように見えます。それもここで、財源問題が出て、財政危機があらためてクローズアップされました。税収のアップは、自分たちの手柄とばかりに、バラマキ予算を打ち出していますが、それも選挙目当てということが堂々と言われています。また本来自由であるべき、企業の投資、人件費などに政府が口を出していますが、裏目に出た時のツケは税金でということになります。財政再建を真面目に考えているとはとても見えません。

本質を取り上げないマスコミを上手く使い世論形成を目論んでいるようですが、国民不在の政治は後世に大きな禍根を残します。

夕方の電車内、隣に座った高齢の男性が、先に座った小学生を大声でしばらくの間叱責していました。一番前で電車を待っていたところへ小学生が割り込んだということでしたが、降りる時に見ると小学生は視覚障害者のようでした。

心の余裕が大事でいつまでも持ちたいと思いますが、年の所為か、時代の所為か、だんだんそうはいかなくなってきた感じです。

先日の旅行で、京都駅の地下鉄への階段で、踏み外して前につんのめってしまいました。これまでですとすぐに立ち上がれたのですが、立ち上がりがれず手を貸してもらう羽目になりました。階段のへりにあるテープが暗くて見えないとぼやいてみたものの体力の衰えに愕然としました。

それにしても、関西のエスカレーターでの乗っての並び方、不自然です。大阪は右側ですが、京都は関東と同じく左側です。大阪では、しょっちゅう間違えます。関西を訪問する外国人には、大きな負担になっているのではないかでしょうか。

会員の広場

「サイパン島陥落」（公平良三、Douglas Westfall 共著）P126より

以上見てきたように太平洋戦争がいかに無謀な戦争だったことは明らかである。国力が百倍も違う米国に開戦したことは、現代からみれば信じられないことであるが、日本はそれをやってしまったのだ。

しかもこれが一人の独裁者が出現して行ったことではなく、国としての合意された長期戦略がなかったこと、および日本には、ルーズベルト、チャーチル、スターリンのような強力なリーダーが不在のため、その場限りの方針を決めている中に、真珠湾奇襲という暴挙に進んでしまった。

それに加えてメディアに踊らされた国民の殆どが戦争に熱狂したことも、満州事変から対米開戦の原因なのだ。

これが日本の恐ろしいところで、戦後の日本の国・企業に依然として残っている大きな問題である。従って今後も、日本は戦争ではないが、同じような過ちを繰り返すであろう。そこで著者は、第6章でこの問題を取り上げて今後日本が同じ過ちを繰り返さないようにこれらの問題の解決策を提言した。

太平洋戦争では、300万の尊い命が奪われたが、その原因は軍部による人命軽視の考えのためである。航空機・船舶を作るには多大な費用がかかるが、「兵隊は一銭5厘（郵便はがきの料金）の召集令状で集められる」などと言われていた。捕虜取り扱いに関するジュネーブ条約に加盟せずに「戦陣訓」で勝ち目のない戦いでも玉碎して死ぬことを奨励した結果、戦死者の数を増やしてしまった。さらにロジスティックスを考えずに補給が追い付かないほど戦線を拡大したので、餓死・病死の数も多くなってしまった。（以下略）

連載作品

■龍のコンサート三昧2010—（10）

生部 圭助

2010年にヨーロッパへコンサートを聴くための旅をしました。その旅行記を、2006年、2008年に続き、NPO自立化支援ネットワークの『メルマガIDN』の編集後記に連載しました。編集後記の内容をここに転載し、写真などを追加しています。2010年4月1日 начиная с,同年8月15日

（第十回）アムステルダムでの2つのコンサート

今回のコンサートツアーで最後に訪れたのがアムステルダム。2010年3月15日の昼過ぎに到着し、18日の午後に出発するまで滞在した。その間盛りだくさんの楽しみを欲張った。途中デン・ハーグにも行って美術館を訪れたことは前号で紹介した。今回は世界的有名なコンサートホール《コンセルトヘボー》で聴いた2つのコンサートについて紹介する。

コンセルトヘボウ

コンセルトヘボウはオランダのアムステルダムにあるコンサートホール。戦前からの姿をそのままに残されている音響の優れたコンサートホールとして知られ、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の本拠地となっている。

1883年に実施されたコンペの結果、オランダ乗馬学校を設計したA.L.ファンとヘントの案が採用された。後にこの二人は共同でアムステルダム中央駅の設計に携わっている。

ネオ・ルネサンスと新古典主義を折衷したファサードが特徴的なホールは1888年4月に落成した。大ホールは座席数2037席で、残響は観客なしで2.8秒となっている。

アムステルダム市内はほとんどが帶水層上の干拓地であり、当初より慢性的に地盤沈下に悩まされていた。倒壊寸前の危機的状況を迎えた1983年に帶水層の下にコンクリートで基礎を作り、支持杭も金属製のものに置き換える大工事が行われた。

その後1988年に
は、東翼（向かって
左）に補強や旧構造
の保護も兼ねて2層
建ての鉄柱と大ガラ
スによる新エントラ
ンスが増築された。
この部分にはインフ
ォメーション・チケ
ットカウンターやカ
フェも入っており、
ホールへの入り口も
ここが使われてい
る。



コンセルトヘボウを遠望する

《マタイ受難曲》の演奏会

2010年3月15日にアムステルダムに到着し、バスで市内の要所を案内してもらって、ホテルにチェックインし、夕方の食事の時間までフリータイムとなった。早速、あくる日のオランダ・バッハ・オーケストラ＆合唱団演奏会による《マタイ受難曲》のチケットが入手できるかを確かめるために、ホテルのフロントに行った。

このチケットはツアーに出かける前に手当てできたが、ツアーの最終段階での体調がよければ現地で調達しようと考えていた。

フロントの女性がネットで検索してくれて、席の残はあるとのこと。ネットで予約しなさいとページを示してくれたが、インプットする内容が多く、要領を得ないところもあり、結局、コンセルトヘボウのチケットの窓口まで行くことにした。幸いにもホテルとコンセルトフェボウの間にはトラン（電車）も通っており、歩いても行けるところに位置関係にあった。

難なくチケットを入手することが出来た。窓口の女性は、このチケットで、行きと帰りのトラムに乗ることが出来ると教えてくれた。アムステルダムでは、コンサートのある夕方は、ネクタイを締めたトラムの乗客が増えるそうである。

次の日の3月16日の夕方、《マタイ受難曲》のコンサートに出かけた。

古楽器を使ったこのオーケストラの音は柔らかく、このホールの音響の良さを実感できた。休憩を挟んで、長時間の演奏のあと、多少のくたびれと満足感に浸りながら、たくさんの聴衆だった人達と共にトラムに乗って戻った。



マタイ受難曲の演奏終了後の全景

ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団

1888年にコンセルトヘボウの専属オーケストラとしてアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団は誕生した。このオーケストラが有名になったのは、24歳の若さで第2代常任指揮者となり、その後半世紀に渡ってコンセルトヘボウ率いたヴィレム・メンゲルベルクの功績が大きい。

1938年からメンゲルベルクと並んで首席指揮者を務めていたエドワアルト・ファン・ベイヌムが就任、1959年に57歳のベイヌムが亡くなり、オランダ人指揮者ベルナルト・ハイティンクが常任指揮者に抜擢された。

1988年、創立100周年を迎えたコンセルトヘボウはベアトリクス女王より《ロイヤル》の称号を下賜され、現在の名称に改称された。創立100年を期にハイティンクは常任を退き、リッカルド・シャイーが後を継ぎ、2004年9月からはマリス・ヤンソンスが常任指揮者となっている。

ベルナルト・ハイティンク

ハイティンクは1929年生まれのオランダの指揮者。1955年にオランダ放送管弦楽団の次席指揮者に就任。1961年から1988年までアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団、1967年から1979年までロンドン・フィルハーモニー管弦楽団のそれぞれ首席指揮者に就任。

1978年から1988年までグラインドボーン歌劇場の、1987年から1998年まで英国王立歌劇場の音楽監督を務める。2002年からドレスデン国立歌劇場の音楽監督に就任した。2006年からシカゴ交響楽団の首席指揮者に就任。

ハイティンクには縁があり、1995年にボストンでマーラーの交響曲第10番を、2006年にはウィーンで、ショスタコーヴィッヂの交響曲第10番を聴いている。

F. P. ツィマーマンによるブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》の演奏

ツィマーマンは1965年2月にドイツのデュースブルク生まれのヴァイオリニスト。1979年に14歳でルツェルン音楽祭に出演。1981年にはソビエトでデビュー、1984年にはロリン・マゼール指揮ピツツバーグ交響楽団の演奏会でアメリカデビューを果たす。1983年6月に若杉弘指揮ケルン放送交響楽団のソリストとして初来日している。

ブラームスは長い期間（作曲を開始して14年、萌芽から数えれば21年間とも言われる）かけて第一番の交響曲を作曲し、そのあと短期間で交響曲第二番を作曲し、その翌年の45歳の時にヴァイオリン協奏曲を作曲した。彼が最も充実した時期に作曲された曲といえる。

長い序奏の後ヴァイオリンが登場し、主題の提示、その再現、カデンツアを聴いているとあつという間に1楽章が終了、2楽章の冒頭でもオーボエが主題を奏てる間、ツィマーマンは待たされてヴァイオリンが引き継ぐ。3楽章では、ヴァイオリンが冒頭から活躍し、曲は佳境に入り、最後は力強く曲を終える。

演奏のでき出来栄えはツィマーマンとハイティンクの写真の表情より想像することにする。



F. P. ツィマーマンと B. ハイティンク
ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》の演奏終了後

ショスタコーヴィッヂの交響曲第15番の演奏

作曲時期は1971年。交響曲第10番以来の伝統的な4楽章の交響曲である。演奏される機会は少ない。今回初めて聴いたが、ソロなどが目立つ室内樂的

なオーケストレーションや、各楽章にロッシーニ、ワーグナー、ハイドン、自作の交響曲からの引用などもあり、聴いていて楽しいところもあり、ホールの音を楽しむのにも適した曲だった。



B. ハイティンク
ショスタコーヴィッヂの第15番交響曲の演奏終了

エピローグ

世界の音楽ホールの中では是非聴いてみたい4つのホールがあった。ウィーンの《ムジークフェラインザール》、ベルリンの《フィルハーモニー》、ボストンの《シンフォニーホール》をすでに聴いて、残されていたアムステルダムの《コンセルトヘボー》を、ヨーロッパへの3回目のコンサートツアーで聴く機会に恵まれた。

2010年3月9日に成田を発った今回のコンサートツアーは、3月18日の昼過ぎに成田へ到着することすべてを終えた。5つの都市を訪れ、現地でチケットを調達したものも含めて6つのコンサートを聴き、ミュンヘンとアムステルダムとデン・ハーグでは、美術館を楽しむことも出来た。

今回のツアーで見聞きしたことを綴って4月1日に始めた《龍のコンサート三昧2010》は、今回をもって最終回とする。

紺碧の空の下に・・<オーストリア><クロアチア><スイス><スペイン>

<オーストリア> (27)

大竹 漢州

ウィーン(9月3日)・つづき

リンクを一周するオープンバスの階上から、ウィーン旧市街の名所旧跡を満喫しました。(4)

モーツアルト時代のコスチュームを身に着けて楽団員が楽器を抱えて舞台に入ってきた。観客席から拍手が湧きます。先程入場した中間扉は閉ざされて演奏会は始まりました。所謂舞台の上手（右）からオーケストラメンバーと同じ服装をした指揮者が登場すると観客の拍手は一段と大きくなりました。楽団員の方に向いた指揮者の棒が静止した瞬間、「アイネ・クライム・ナハトムジーク（KV5252）」が、大ホールに静かに流れ始めました。モーツアルトが1787年に作曲したセレナーデ13番です。しかも最も有名なセレナーデです。ナハトムジークはドイツ語で Nacho（夜）+Music（音楽）を合わせた造語で、日本語では小夜曲と呼ばれています。

次の曲は「交響曲40番（KV550）」です。時間の都合2楽章を演奏して終わりました。この40番（ト短調）は、25番と共に短調で作曲された交響曲として有名です。更に交響曲39番、40番・41番と合わせて、モーツアルトの三大交響曲と言われています。管弦楽器を主体とした30人のオーケストラではありますが、流石ウィーン・フィルファー・モニー管弦楽団の団員だけあって素晴らしい音色が伝わってきます。

歌劇曲の「フィガロの結婚（KV492）」と「ドン・ジョンソン（KV527）」と続きます。「フィガロノ結婚」はフランスの劇作家カロン・ド・ボーマルシェの風刺劇に作曲したオペラの作品です。台本はロレンツォ・ド・ポンチです。前作「セルビアの理髪師」に引き続いて作曲されたものです。ウィーンでは1786年にモーツアルトが30歳の時、ブルグ劇場で初演されましたが、余り高い評判は受けませんでした。これより先立ってプラハのエステート劇場で初演した時には、大ヒットして街行く人々が「フィガロの結婚」の一節を口ずさんで行く姿に感激したモーツアルトは、父レオポルドに書き送っています。翌年「ドン・ジョバンニ」を作曲しています。台本は「フィガロの結婚」の台本作家ロレンツォ・ド・ポンチでした。スペイン伝説の放蕩者であったドンファンが物語の主人公です。前夜になっても「ドン・ジョバンニ」の序曲は未完成であったようです。モーツアルトは襲ってくる眠気を抑えるために妻コンスタンツェの話を聞いたり、飲物を作ってもらったりして徹夜で序曲を書き上げたそうです。飲物はワインナーコーヒーかも知れません。

休憩に入りました。旅人夫婦は2階のカウンターバーに行き、ビールを傾けて余韻に浸りました。何と素晴らしいホールなのだろうとか。何と素晴らしい作曲なのだろうか。何と素晴らしいオーケストラなのだろう。この空間から去り難い心境で一杯です。冷たいビールを飲みながら、突然旅人に音楽の楽しみを教えてくれた神原世詩朗氏と東芝広告部長安田吉氏の姿が浮かびました。既に兩人とも故人になりました。共に東芝オーレックス・コンサートを企画実行した音楽事務所と主催者の責任者でもありました。感激した旅人は、懐かしい人と語りたい気分で一杯でした。

ビールをもう一杯注文しました。神原氏は口癖のように、当時の音楽家は決して裕福ではなく、オペラや交響曲が湯水のように沸いて出る若い頃は人々から持て囃されても、晩年は決して幸せではなかったと言っていたことを思い出しました。モーツアルトは36歳の若さでこの世を去っています。1791年に「レクイエム」を作曲中に死の床に就いたといわれています。又本

人の意思で聖職者による終油は受けていません。遺体は家族や友人たちの見送りも無く、靈柩車に乗せられることも無く、下部が開閉する「簡易型の棺」に唯一納められたモーツアルトは、サンクト・マルクス墓地に運ばれて、無造作に他の遺体と共に共同墓穴に埋められてしまいました。大作曲家の最後としては、誠に寂しい限りです。ペストやコレラの流行病を罹病して死亡しなかったにも拘わらず、不可解ですが、当時の葬儀方法と言ってしまえばそれまでです。

モーツアルトの死因にも数多くの謎があります。モーツアルトは小柄であったため、度々の長距離の馬車の旅で体を害してリューマチが原因であったとか、好物のポークカツレツの豚肉に宿っていた寄生虫が原因であったとか、或いは、モーツアルトを良く思っていなかった二流の音楽家に盛られた毒が原因であったとか、又々妻コンスタンツェに毒を盛られたとのが原因で死亡したという諸説粉々ありますが、どれ1つとしても死因も不明であり、サンクト・マルクス墓地の埋葬地も確定されていません。

神原氏からモーツアルト死後おん経済状態も聞いたことが在ります。モーツアルトは借金を今日の日本円に換算して 20,000,000 円も残して死んでいます。当時のモーツアルトの年間収入は 10,000,000 円をくだらなかつと言われています。死亡原因も謎なら、借金も謎です。モーツアルトは謎だらけの人間ですが、唯一わかっていることは、36 年間に生きて、KV672 の楽曲を書き上げたことです。今日研究者が借金の理由として上げているのは、「夫婦ともに浪費家であったため、常に自転車操業の生活」「ビリヤード・特朗普の賭け事好き」「妻コンスタンツェが難病で治療費が嵩んだ」ですが、いまだに解明されません。休憩時間も残り少なくなりました。記念にビールを飲んだ細長いグラスを戴いて席に戻りました。

再び演奏会が始まりました。流れた曲は「魔笛 (KV 620)」です。この歌劇（ジングル・シチュピール）が初めて上演されたのは、宮廷劇場ではなくザルツブルグ以来の旧友であった劇場主シカネーダーが主催する一般市民劇場でした。「魔笛」は王子タミーノが鳥刺しのパパケーノとともに夜の女王の娘パミーナを救う物語で、途中で善玉の主役が悪玉に変わる場面変化を取り入れています。台本もシカネーダーが書き下ろしていました。「魔笛」が上演されたのは 1971 年 9 月 30 日でした。モーツアルトがこの世を去る 1 月余前のことです。死の床に就いてもモーツアルトは「魔笛」の成否が大きな関心を持っていましたが、書き残されています。モーツアルトはフリーメーソンでした。シガネーダーの強い影響を受けたと思われます。フリーメーソンの起源は諸説ありますが、普遍的な人類共同体の完成を目指すことを目標としている 18 世紀にヨーロッパから広まった団体です。フリーメーソンの理念をシガネーダーが台本を書き、モーツアルトが作曲した「魔笛」がその代表作です。静かに「魔笛」が終わりました。指揮者は拍手とともに舞台を退場していきました。

拍手とともに再び指揮者は舞台に立ちました。指揮棒の先からは、あの印象的なウィーンを代表する国家的な曲の一音が静かに響いてきました。ニューイヤー・コンサートでは、一瞬ウィーンっ子から拍手が沸き起こり、受け指揮者が新年の挨拶をするのが恒例です。期待していた拍手は無く、曲は

途切れることなく演奏され続けました。勿論ヨハン・シュトラウスの「青きドナウ」です。オーストリア人にとっては、国歌と同じ意味のある曲です。演奏が続いている間、旅人夫婦がオーストリアを旅した各地の思い出が蘇ってきました。オーストリアは印象の強い国です。楽しい旅でした。そして最後を盛り上げた曲は、オーケストラと観客が一体となったお馴染みの「ラデスッキー行進曲」です。老いも若きも「楽友ホール」の時空を共有している喜びを表現するように、指揮者の指示に従って手拍子がホール全体に広がっていました。そして楽しかった演奏会も終を迎えました。

名残惜しさを後にして「ウィーン楽友協会ホール」から街路に出ました。昼間は夏日であったウィーンの街も夜になると幾分か冷え込み、既に秋が深まっていることが身をもって感じられます。第二次世界大戦後の米仏英の連合軍によって統治されていた時代がありました。当時を舞台にした「第三の男」の Zithert (チター) の曲が聞こえてくるようです。最後の余談になりますが「楽友ホール」はソ連軍に占領され、廐として改装される運命になりました。音楽を愛するウィーン庶民は力で食い止めたと聞きました。オーストリアを人はソ連を嫌悪している理由がここにあります。ロシア人は文化を理解しない野蛮人とレッテルが貼られています。

感激すると空腹を感じる人間と眠くなる人間がありますが、旅人は前者で、悦子は後者です。ラディソンホテルに戻ると急速に空腹感を感じました。悦子は既にベッドで就寝しています。空腹を満たすために JTB で貰ってきたカップラーメンを食べました。演奏会の後にしてはアンマッチ感がありましたが、空腹には勝てませんでした。

天地・アーカイブス（2編）

（第1編）

2006年9月に発信した190号から「江戸川柳で読む日本裏外史・6部」が始まっています。その第4回に＜藤原定家と百人一首＞とありましたので、年末を控え取り上げさせてもらいました。なお、次号からその後を順次続けてみます。

高野冬彦さんは、故人となられましたが、都立高校の教諭を経験され、長年にわたってまとめられていた原稿、＜蕪村礼賛＞＜俳句でつづる東京詩情記＞そして＜江戸川柳で読む日本裏外史＞の3編を天地シニアに寄託されましたので、入力しネットワークテーブルに掲載しました。とくに＜蕪村礼賛＞、原題は別でしたが、天地シニアで編集、製本してご希望の方に配布しました（有料＝実費）。以上（事務局）

江戸川柳で読む日本裏外史

高野 冬彦

高野さんは、「鎌倉時代に入ると、歴史資料が急に殖えて、勝手な空想が入る余地が次第に少なくなり、面白みのある川柳も少なくなったと感じる」と云われています。

こんな書き出しが、第6部が始まります、長いものはありませんが、9回分の用意があります。最後の第7部はあとがきとなっています。(故小作)

第6部

第4回 藤原定家と百人一首 一一王朝文化への憧憬と無知

九十九は選び一首は考える

江戸の町人の思考方式の中で、どうにも理解しにくい事の一つに、王朝文化に対する奇妙な憧憬がある。

歌一首あるで話にけつまづき

なんて句もあるが、三十一文字などと言うものは、凡そ自分達の生活には縁の無いものであるにも関わらず、妙にこれにこだわる所があるのである。その代表的なものとして、百人一首と雛祭りが挙げられるかと思う。

江戸時代でも、子供の遊びは数が多く、様々の変化や流行もあったと思うのだが、そうした中で、三月三日が女の節句として定着し、雛壇を飾る様式など決まったのはこの時代であり、また正月の遊びとして、百人一首の歌留多取りが、飽きることなく続けられたのである。

勿論こうした風習は、最初は武家の奥向きから始まつたらしいが、それが何時か町方に普及して行く。こうした社会心理学的構造は、中々説明に困難な部分が多いようである。

圧倒的な実力で、安定政権を樹立した江戸幕府は、京都朝廷に対しても、何ら憚ることなく、実質的な政治権力は完全に剥奪してしまったにも関わらず、その後も將軍の正室には、多く京都の堂上方の姫君を迎える、一貫して王朝文化尊重の態度を崩さなかつたのは、勝者の余裕なのか、朱子学的な偽善なのか、よくは解らないものの、その底には、もの事を最後まで割り切らず、多少の曖昧さを残すことを良しとする、日本の文化の伝統がしからしめたのではないかろうか?

そしてこうした考え方には、やがて一般庶民の間にも浸透して、単に実用的な価値のあるものだけを尊重するのではなく、無用なままで、どこか理解し難い側面を持つものを、奥ゆかしいとして、無条件で尊敬しようとする、そんな傾向を生み出したのであろう。

こうした江戸ツ子にとっては、藤原定家がどういう価値基準によって、この百首を選んだかなどということは、別にどうでも良いことなのである。

落語の「千早振る」ではないが、歌の意味などは何一つ理解出来なくとも、なおこの流麗なリズムの奥に、現実を遙かに越えた神秘な別世界の存在を感じ取れれば、それで満足していたのであろう。

但し、こうした古典世界への憧憬は、現実の生活を左右するような具体的な要求にまでは、決して発展はしなかつたようで、その証拠には、定家という歌人の実体とか、当時における最大の事件である「承久の変」や、その主人公である「悲劇の帝王」後鳥羽上皇の運命などについては、驚く程無関心

で、川柳などでも殆ど敢り上げていないのである。

鎌倉幕府の成立以来、厳しさを増していた公武両政権の対立は、将軍実朝の暗殺によって源氏の直系が断絶するという事態を迎えると、当然の結果として緊張の激化をもたらした。一度は失った政権の回復を焦った朝廷は、それを妨げる北条執権勢力に対し、実力を以てしてもこれを排除すべく、北条義時追討の院宣が発せられたのが、承久三年(1221)の五月のことであった。結果的には雲上人の事態認識の甘さは、武家方の冷徹なリアリズムの前に敵すべくもなく、忽ちの内に全面的な敗北を喫して、北条執権政治の確立のお手伝いをする形となってしまった訳だが、こうした敗北の中にこそ、常に非現実の中にしか成立しない、屢々樓のような王朝の美学を感じるのは、決して僕一人ではないと思うのだ。

殊にその中に立つ後鳥羽上皇の不世出の英気、多芸多能で、あらゆる方面で自己の力を試して見様とする生命力、そしてそれを包む香り高い詩心。古くは日本浪漫派の保田与重郎から、最近の丸谷才一氏に至る、多くの作家文人を魅了して止まないこの不思議な人物について、江戸ツ子が、何故此れ程まで無関心なのか、どうにも理解に苦しむのである。

川柳も有ることは有るのである。ただ彼等にかかると、深刻な「承久の変」も、芸者をめぐる旦那と置屋の喧嘩のようになってしまうのである。

芸者と言うのは、言うまでもなく白拍子・亀菊のことで、上皇の寵愛を得て「伊賀ノ局」となどと呼ばれるに至ったのだが、彼女が旦那から頂戴した、摂津の長江、倉橋の荘園の監理を巡って、“従来の地頭をやめさせろ”、“いや、やめさせない”という争いが騒動の因となったのである。

承久の乱は転びの出入りなり
亀菊振り付け承久の乱拍子

勿論亀菊のわがままから出たことだが、その言いなりになつてゐる旦那も少しだらしが無いと言いたいらしく、

綸言はみな亀菊の口うつし
亀菊の家に宸筆あまたあり

所がこれに対して、置屋の亭主・義時はひどく頑固で、何としても芸者の身勝手を許そうとしないのである。

菊一文字と反り合はぬ相模もの
玉藻より凄い奴だと江間は言い

旦那は亭主を呼び付けて、叱ったりもしたのだが、ガンとして首を縊に振らない。「あんな奴、放っておいたら、旦那の御威光にも関わりますわよ。」と言っただかどうかは知らないが、災いは常に女の口から出るものである。

義時勅答二分づつ使はされ
義時は違勅の罪でござりやす

どうも、ここまで安直に解釈されていたのでは、悲劇などと言うものは生まれようがないのであって、百人一首にある後鳥羽上皇の御歌にしても、

人も惜し 人もうらめし あじきなく
世を思ふゆえに もの思ふ身は

この悲痛な御嘆きできえ、彼等にかかっては、やはり旦那と置屋の延長なのである。

人も惜しとは亀菊のことと見え
上の句は亀菊と義時のこと

これに対し、定家自身については、どのような受け取り方をされていたのであろうか？

「明月記」の中の有名な一節に、「紅旗西戎は、吾がことに非ず。」

という言葉があるように、彼は現実の政治的変動には一切関わらず、意識的に無視するという生き方を自ら求めていたようである。

中流貴族のひねくれた処世観とも言えるが、それによって彼自身は、終始苛酷な現実に、直面することなく、平坦な保身の道を辿ることが出来たことは確かである。

あれ程恩顧を受けた後鳥羽上皇に対しても、「承久の変」で没落された後は、掌を返したように疎遠になり、自分の選んだ「新勅撰和歌集」から、上皇並びにその御子・順徳院の御歌を削り取るという苛酷なことも、幕府の命令とあらば、平然とやってのける冷たさを十分持っていたのである。

「自分の仕事は、和歌という貴族文芸の世界を、美しいままに後世に伝える事だ。」

定家は、そう覚悟していたに違いない。父祖代々和歌の家に生まれ、生涯を通じてその本質を追求してきた彼としては、有史以来の京都朝廷没落の危機に際して、この王朝の権威と栄光を未来に遺すためには、却って和歌という、このかすかな文芸の伝承に託す他はない決心した男の一刻さが、此處には見られるような気がするのである。

後鳥羽院が、西行の歌を高く評価し、

「歌は結局の所、人間の心、生き方の反映でなければならない。」
とする近代的な文学観に近い考え方を示したのに対して、定家の歌論は、より抽象的な美の追求を目指し、その実現の為には、言葉を厳選し、リズムを整え、枕言葉は勿論、縁語・懸言葉・本歌敢りと、言語技術の粋を尽くして、完璧に構成されるべきだとする、或る意味では無機的なまでに技術本位のものだったのである。彼にとっては、人間感情の生まのままの表出など、歌とは言えないものだったに違いない。

全ては精製され、濾過され、厳密な科学的操作を通して、完全な結晶体にまで誘導される。芸術とは、こうした厳しい過程をこそ言うのであって、百人一首もまた、こうした彼の芸術観に基づいて制作された作品の一つだったのである。

定家が、「百人一首」という、この特殊な詞華集を、どんな積もりで編纂し

たかについては、織田正吉氏の「絢爛たる暗号」が導火線となって、最近頓に世間の関心を集めているようである。元来は彼の義父に当たる宇都宮頼綱の小倉山山荘の、障子に貼った色紙型だと言うのだが、その順序や配列の中に、一種の暗号めいた意図があり、定家はその中で、遙かに隠岐の離島で鬱屈の余生を送る後鳥羽上皇に、秘かなラヴコールを送っていたのだとか、実は縁語・懸言葉を糸にして、縦横十枚づつ繋ぎ合わせると、後鳥羽院のお気に入りの水無瀬の離富を彷彿させる、一つの絵模様が浮かび上がってくるばかりか、上皇や愛する式子内親王の御歌なども、互いに呼応する形で配置された、一種の絵物語が出現するようになっていたのだとか（林道直氏の説）、色々面白い学説が飛び出しているのも、やはり百人一首に対する、民衆の根強い人気によるものに他なら在いであろう。

大体歌歌留多が、遊戯として定着したのは江戸の初期、「人倫訓蒙図彙」などに見えるのが始めらしい。勿論それ以前にも、連歌師の宗祇などが、二条派の歌道宣揚の教材として、各地で普及させた事もあり、特に女子の手習いのお手本として広く利用されたらしい。遊戯としては、「貝おほひ」から変化した「歌貝」があつたのだが、当時南蛮渡来のウンスンかるたや天正かるたが、一斉に禁止となり、それに替わる遊びとして、花札の前身である「花かるた」が発明された副産物として、この「歌かるた」も工夫されたのだと言われている。

しかしこうした歴史を、いかに調べて見たところで、その底には定家という、類い稀な言葉の魔術師が居り、その底知れない知性と批評眼によって選び抜かれた古典文芸の完成された美しさが、否応無しに人々の心を捕えていたからだという事実を否定することは出来ないであろう。

川柳子も定家には、一目も二目も置いていたらしく、

御硯へ時雨の通ふ小倉山
御父子して千と百とをおん選び

千というのは、父親の俊成卿が選んだ「千載和歌集」を指す訳だが、要は定家の百人一首に対する感謝の気持ちであろう。

歌かるた好いた男を入れたがり

なんて句がある。男女の交際の難しかった江戸時代、この時ばかりは、“お手つき”でもなんでも、万事黙認の無礼講で、

「あい見ての後の心にくらぶれば…」

てな際どい恋の歌を取り合えたのだから、若い者にとっては、こたえられない気晴らしだった訳である。

だから百人一首関係の川柳には、内容についての批判など一つもない。たまには、

絵がないと男女の知れぬ百人一首

なんてのもあるが、これはまあ無理もない次第で、赤染衛門とか、伊勢大輔なんてのが女の名前だとは、常識では考えられないからである。

後は歌の題材だとか、並べ方の順序などについて、やれ梅の花を詠んだ歌がないの、鶯が鳴かない、蛙が出てこないなどと下らないことを取り上げて、

百人が言葉もかけぬ花の兄
定家の門に鶯泣いている
鶯も蛙も鳴かぬ小倉山

だとか、紫式部と赤染衛門を対比させて、

江戸染も京染も入る百人一首

或いは、関東の代表としては、鎌倉の源実朝が一人しか選ばれていないのを見て、

百人のうち一人食ふ初鰹

何のことではない、小さな子供が気に入った玩具を何度も分解して遊んでいるように、他愛の無い発見に夢中になっている感じなのである。また別に、

しのぶれど色に出にけり盜み酒
もてぬ夜はなほうらめしき朝ぼらけ

なんて句もあって、流麗で耳ざわりの良い言葉のリズムが、いかに人々に愛されていたか、百人一首というものが、いかに庶民の生活に深くしみ込んでいたかを、今更ながら考えさせられる材料となっている。

千年近くも音の詩人達の作品が、此れ程一般人の日常生活に入りこんでいるという事は、外国にもその例は少ない筈で、定家の功績は大変なものだと思うのだが、それがそのまま詩人としての偉大きさを示すものかどうかは、又別の問題のようである。

歌留多競技は現代でも益々盛んで、上の句、下の句、見事に整理されて全て頭の中に入っている人も少なくないと思われるが、同時に此等の人々が、その歌の内容をどこまで詩として理解しているかどうかは、また別の問題である。

誰にも意味がわからないままに愛誦されている詩－そんなものが外国にあるかどうかは知らないが、百人一首には確かにそんな一面があるようで、それが定家の才能の豊かさによるものか、或いは詩人としての不幸を招いているのか、その辺はなお議論の余地のあるものの、とにかく日本の文化、特に江戸文化の一つの特異な側面を示すものであることは間違いないようである。

(次回は「最明寺入道時頼」です)

〈第2編〉

2007年2月発信の201号に掲載したものです。魚山釣太さんはペンネームですが、一部上場会社の部長さんでした。旅行と釣りとお酒が趣味のようでしたが、著作の一つ「アイダホ紀行」が図書館協会推薦図書となるほ

どの文筆家で天地シニアにも多数の作品を寄稿してくださいました。日本物は少なかったのですがその一つをご紹介します。80歳を越えた年齢になるはずですが、最近のご様子がわからず心配しています。(事務局)

〔土佐南国市釣り紀行〕

魚山釣太

梅雨入りした6月中旬の土佐湾の船釣りは、まさに「入れ食い」と言って良いほどの爆釣だった。水温も上昇し曇り時々小雨の天候で、しかも潮回りが良ければ、釣りのほとんどすべての好条件を備えていることになる。

水温が20度近くまで上昇すると一般的に魚の活性が高まることは他の生物と同様である。低水温の冬の季節には深場の海底に逃げ込んでいた魚達は、浅場への移動を始め、或いは海中の中層から上層へと上がって回遊を始める。曇天は、海釣りのゴールデン・タイムとされる常用薄明と薄暮、すなわち「朝まずめ」「夕まずめ」と同様の条件を長引かせることになる。雨は空中で溶融した酸素を海水にばら撒き、これまた魚の活性を高める要因となる。また、魚の食餌活動が新月満月前後の大潮の期間に最も活発となり、小潮の期間が最低となることは古来変わらぬ常識である。また、年間を通してみた場合、例えば、カレイやスズキの最も良く釣れる月が11月、12月であるように、魚種によって多少の違いはあるが、平均的な釣果指数では5月と6月が最高である。従って、6月の爆釣は、すべての好条件が重なった結果と言えるかもしれない。

今年は、11月の10日から12日まで、2泊3日の日程で、土佐湾へ2度目の釣行をした。秋はまだ水温の下がらない10月中の方が良かったかもしれないが、船主の平尾孝雄氏の帰省の日程と小生の都合とで、この日程になってしまった。

前編に記載したとおり、平尾氏は東京在住であるが、郷里の老人ホームに一人で暮らしている母堂を見舞うために、毎月一度は帰省しておられる。帰省した際には、南国市の高知空港に近い「浜改田」というところの古く大きな農家に滞在させていたが、人家の途絶えた寂しい集落のはずれで、背後は竹藪、隣りには樹齢600年を超える楠が繁る祠のような小さな神社「楠大明神」があった。日常生活に不便なだけでなく、賑やかな東京の生活に慣れた平尾氏には寂しすぎて、夜など恐怖を感じることもあると言っていた。そして遂に、南国市の西隣、高知空港から約4キロ北西の香南市野市町東野という街中のアパートを借りて転居してしまった。土讃線後免駅から野市、赤岡を経て土佐湾に沿って走る「くろしお鉄道、後免(ごめん)・奈半利(なはり)線」の、野市駅のある古い街道沿いで、そこからフィッシング・ポートを係留している吉川マリーナまでは、クルマで5分程の便利なところだった。

この街道は高知市から安芸市に向かう旧街道で、東野(ひがしの)周辺には町屋風の古風な家屋が立ち並んでいるが、なぜか飲み屋やバー、小料理屋の多く目に付く所である。しかし駅周辺の繁華街を少し離れると、長閑な田園が広がり、物部川流域の緑豊かな森や丘に囲まれている。

近世初頭に野市周辺を開拓したのは、野中兼山の養父、野中直継で、あとを継いだ兼山が物部川の水を引いて「上井(うわゆ)」「下井(しもゆ)」の

2本の用水路を作り、さらに「上井」の水を「十善寺溝」「町溝」「東野溝」の3方向に分水した。これによって野市一帯に約600ヘクタールの新田が開発されたという。平尾氏が転居したアパートのすぐ傍をこの「東野溝」が流れている。

野市駅から北方へ徒歩10分ほどのところには「坂本竜馬歴史記念館」があり、竜馬の事跡の26場面を130体の蠍人形で再現している。維新の大立てもの坂本竜馬はなんと言っても郷土の誇りであり、この他にも高知市内の浦戸城山に「県立坂本竜馬記念館」がある、その生涯の記録や遺品などが陳列されている。京都円山公園内にある「坂本竜馬、中岡慎太郎二人像」は、昭和9年（1934年）の建造であるが、第2次世界大戦中の金属供出で一度取り壊され、昭和37年（1962年）に京都の高知県人会によって再建されたものである。

野市駅北方2キロのところには標高200メートルほどの金剛山（別名三宝山）という大げさな名前的小山があり、その麓には四国霊場28番札所の真言宗「大日寺」がある。

僧行基の開山とされ、ご本尊の大日如来坐像（国重要文化財）は藤原時代の作と云われる。目、耳、鼻など首から上の病に靈験あらたかなお寺だそうで、本堂から150メートル程奥まった「奥の院」には、弘法大師が爪で刻んだと伝わる「爪彫り薬師」がある。

この28番札所から、四国山脈の山麓に沿って西へ、南国市の29番札所「国分寺」、高知市の30番札所「善楽時」と続き、南に下って31番五台山竹林寺、32番禪師法寺、浦戸湾の西岸の33番雪溪寺と名刹が続いている。

野市の「坂本竜馬歴史記念館」から北へ15分ほど歩くと前述の野市開拓の原点であった三又（さんまた）というところがある。この付近は木立とせせらぎに包まれた自然あふれる遊歩道であり、周辺を散策すると、若き三味線奏者 月岡祐紀子氏の素朴で素直な感性の表現がそのまま伝わってくるような所である。

いささ巡礼 お支度よいか
下に着たるは 紅色なれど
上に着たるは 白装束で
三尺あまりの 三味線もって
四国八十八 流して歩く
四国遍路で 流して歩く

この道 何の道
へんろ へんろ道
空へ空へ つづくやら
海へと つづくやら
あゝ迷い道 いいえほとけ道
なむなむの 大師道 遍照金剛

（月岡祐紀子作の詩の一節より引用）

四国遍路を題材にした文学作品や紀行文は多くあるが、その中でも、瀬戸

内寂聴の「はるかなり巡礼の道」と井伏鱒二の「へんろう宿」が特に印象に残っている。

翌朝は物部川河口の吉川マリーナから午前8時に出船した。先着の釣り船が数隻浮かぶ15キロ程沖合いで、魚探の反応を見ながら錨泊して、釣仕掛けを降ろす。他船の釣り人の様子を観察することも、そのポイントの良し悪しを判断するのに有効である。乗り合いの遊漁船のように、船頭が玄人の場合は、あるポイントあまり食いが良くないと、すぐに錨を揚げて他のポイントへと移ってしまう。

錨が着底してから数メートル巻上げ、ロッドを振って「こませ」のアミエビを撒き散らす。散らしたこませの中に漬け込むようにして、漁探が反応している深さの棚に、再び7本針の擬似餌仕掛けを下ろしていく。ロッドを握った指先に神経を集中して当たりを待つ。時折、静かにロッドを上下して誘いをかける。魚の食いが悪いときほど釣り人の技術、経験がものをいう。ロッドとライン、仕掛けを通して、肉眼では見えない海中の様子を見、魚と対話する。

一箇所で20～30分様子を見ては錨を上げ5～6箇所ポイントを変えたが、今回は6月のときの「入れ食い」状態とはうって変わって漁探に魚影の反応があるにも拘らず、極端に食いが悪かった。午前中3時間程の釣果は、鯛2、カワハギ1、カサゴ1、フグ1、計5匹にすぎなかった。平尾さんの釣果もほぼ同様であった。

翌日は朝6時半に出船したが、北西の風が強く、沖に出ると波が高くて釣にならず、危険でもあったので、物部川河口周辺の岸近くに戻って釣ることにした。土佐湾はかなり沖合いまで底に岩礁が少なく砂地が続いているので、ジェット天秤の投げの仕掛けを使い、青イソメの生餌をつけて底もののキスやカレイを狙って、船上からの投げ釣りを試みたが、掛かってくるのは「オニヒトデ」くらいのものだった。結局この日は鯛1、カワハギ1の釣果を追加したにすぎず、風も更に強まってきたので午前10時頃には納竿して帰港した。

マリーナの傍の吉川漁港には、漁協の直売場があって、その日に揚がった新鮮な魚や、干物、魚のすり身で作った揚げ物(てんぷら)、「ちりめんじやこ」などが市価の半値に近い値段で販売されており、日曜日の午前は買い物客で賑わっている。

この吉川や西隣の赤岡は「ちりめんじやこ」漁の盛んなところだが、この海浜での最高の珍味は何と言っても「どろめ」である。「どろめ」の語源は不明だが、地引網で獲れる「カタクチイワシ」「ウルメイワシ」「マイワシ」の稚魚のこと、「ちりめんじやこ」より大きく3センチくらいのものである。旬は5月で、すり鉢ににんにくの茎の刻みと、味噌、砂糖、酢を入れて摺りおろし、その中に生きたままの「どろめ」を漬けて踊り食いにする。赤岡の海浜で食べる、ピチピチした生きの良い「どろめ」のどごしは最高である。九州の「白魚の踊り食い」は有名で、東京の築地あたりにも季節にはこれを食べさせる小料理屋があるが、土佐の「どろめ」の踊り食いは余り知られていないのではないだろうか。

しかし「どろめ」は踊り食いとして食べられるのは一部であって、大部分

は「ちりめんじやこ」と同様に茹でて乾燥したものを販売している。これも「ちりめんじやこ」とは違った風味と口当たりで、「ぬた」か「二杯酢」で食べると酒のさかなには最高である。5月～6月の最盛期には、吉川や赤岡の漁港近くの作業場で盛んに「どろめ」の釜茹でが行われており、直売もしているので非常に安価に手に入れることが出来る。

もう一つ土佐特有の珍味は「酒盗」である。土佐の海と云えば「かつお」の一本釣が有名だが、新鮮な「かつお」の臓腑で塩辛を作る。ごはんのおかずとしてもおいしいが、酒の肴として絶好である。幕末の土佐藩主、山内容堂は酒好きで、「鯨海酔候」という別名があるくらいだが、その彼がいつもこの「酒盗」を賞味していたそうである。

今回の土佐釣行の最終日は残念ながら海象が悪く、早上がりしたために午後3時44分「はりまや橋」発の高速バスまで時間が余ったので、平尾氏は高知市内の日曜市に案内してくださった。

高知は街路の露天市が盛んなところで、月曜日を除いて毎日市内のどこかで露天市が開かれている。そのなかでもメイン・ストリートの追手筋で開かれる日曜市が最も賑やかで、買い物客や家族連れの散策だけでなく、観光スポットにもなっていて、お天気がよければ4～5万人の人々が訪れるということだ。高知城の大手門から西へ延びる大手筋の約1キロにわたって、片側2車線の大通りの半分に、テントを張った約650軒を超える店が並ぶ。この追手筋の大露天市は、300年以上の歴史があるそうだ。

出店者のほとんどが高知近郊の生産者なので、大部分の店にはこの土地の生産物が格安の値段で売られていた。新鮮な野菜類、「土佐文旦」や「ぽんかん」などの果物、土佐湾の魚の干物、植木や草花、高知名物の珊瑚細工、陶器類や骨董品、その切れ味と耐久性で「土佐の打ち刃物」として玄人筋に珍重される鉈、鎌、鋏、包丁など、すし屋、てんぷら屋、お婆ちゃんが手作りのお手玉を売っていたり、犬、猫、小鳥などのペット、鶏や大きな庭石まで並んでいた。

何店もある野菜売り場で、土佐特有の野菜といえば、「フルーツ・トマト」だ。最近は阪神間のスーパー・マーケットなどでも見かけるようになったが、もともとは土佐の特産品である。普通のトマトより少し小型であるが、表面の赤色が鮮やかで、果物のように香りがよく甘味が強い。

また土佐以外の土地では見られない珍しい野菜としては、土地の呼び名で「チャーイテ」と称するものがある。正式の名前は何と言うのか分からぬが瓜科の野菜ではないかと思われる。瓜よりはやや小振りの大きさであるが、瓜のように全体の表面が滑らかではなく、「かぼちゃ」のように縦に筋目の入った凹凸がある。表皮は僅かに緑色を帯びた白っぽい灰色で、果肉は浅緑色をしている。朝、畠から抜いてきたような土のついたままの大根や、白菜、葱などと一緒に店頭に並べていたおばあちゃんに、その名を聞くと「チャーイテ」と教えてくれた。「皮をむいて薄切りにし、ポン酢をつけて生のままでも良いし、炒め物にしても美味しいよ」と言う。3個で100円と言うので試しに6個買って試食してみたが、味は淡白でさほど特徴のないものだった。

今回の釣行は不首尾に終わったので、本稿も釣紀行ではなく、土佐観光旅

行記のようなものになってしまった。

講演会

奈良興福寺文化講座 27年12月17日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「僧兵」 講師：興福寺執事 辻 明俊

午後6時40分～7時・・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 受講料：500円

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線
新宿駅3分）

第65回 新三木会講演会のご案内

電力・エネルギーの基本的課題を本会で概ね把握できます。原発の行方、安定供給、料金、再生可能エネルギー、電力（小売）自由化、コーポレート・スマート革命、水素エネルギー導入等、2時間（更に希望者は1時間の茶話会）、有数の政策・技術提言者、柏木先生が分かり易く解説します。

年末を飾る「生活・産業必須のテーマ」をお聞き逃しなく。今回は東京工大・蔵前工業会のご支援と多数のご参加を得ます。

記

1. 日 時 12月17日(木) 13:00 如水会館 2F スターホール
2. 演 題 『原子力発電、今後のエネルギーについて』
3. 講 師 柏木孝夫氏 東京工業大学特命教授、
先進エネルギー国際研究センター長
4. 申 込 メール：shinsanmokukai@gmail.com
電話：047-464-4063(留守電有) 090-3813-0137
(氏名、所属明記) 会費：2千円、女性千円、学生無料
3時過ぎから3F 檻の間で茶話会（当日自由参加可）千円。
5. 予 告 第66回（1/21）『映画にみる、日米文化の差異』
マーク・ピーターセン（明治大学教授）
第67回（2/18）『遠くて近い国トルコ』 仮題
A・ビュレント・メリチ氏（駐日トルコ大使）

商 品 情 報

<日本緑茶センター商品>

商 品 名	市 價	天地提供価格
ハーブティー		
POMPADOUR ドイツ商品 (1.5 g × 10ティーバッグ) <ペパーミントリーフ><カモミールフラワー> <ローズヒップ&ハイビスカスフラワー><ミックスフルーツ><ルイボステイー・ストレート><インディアンチャイクラシック>	本体 @ 300円	@ 250円
中国茶		
(日本緑茶センター：茶語・チャニー) <リーフ> 一高級一 <安溪鉄観音><黄金桂><雲南普洱> (以上 70g) <凍頂烏龍 (70g)> <龍井 (60g)>	@ 630円 @ 735円 @ 840円	@ 480円 @ 560円 @ 640円
紅茶		
ドイツのティーメーカー・テーカンネ社 オリジナルブランド紅茶シリーズ (1.75 g × 20TB) <ダージリン><アールグレイ><イングリッシュブレックファースト>	@ 500円	@ 380円
日本緑茶センター：ティーブティック (2g × 10TB) <セイロン><ローズヒップ&ハイビスカスフラワー><ピーチアプリコット><ローズティー><ブルーベリー>	@ 350円	@ 280円
マテ茶（南米のお茶・世界三大飲料の一つ・パラグアイ）		
パハリト・パラグアイ N01 マテ茶・インスタント・タイプ (75g)	@ 1030円	@ 750円
ティーブティック・1.5g × 10TB <マテ・グリーン><マテ・ブラック>	@ 380円	@ 300円
5つのすっきりブレンド茶（凍頂烏龍、ベニフウキ緑茶、甜茶、ペパーミント、レモンバーム）ブレンド	@ 1260円	@ 900円
アルガンオイル (2タイプ) (92g) (モロッコ特産・食用・万能オイル) 超人気商品 ノンロースト (食用・化粧両用) ロースト (食用) の2タイプ	@ 1900円	@ 1500円
オリーブオイル [ナフィサ] (229g) モロッコ、名門農園の製品。高級。 赤 (インテンス) : ドライ : 青 (デュース) : スイート	@ 1800円	@ 1400円

ジェーン・クレージーソルト (113g)	@ 627	@ 500円
----------------------	-------	--------

地元徳島で大人気の梅酒（徳島県・吉野川市・美郷）

＜東野リキュール製造所＞

N0	商 品 名	(特 徴)	製 造 元	天 地 價 格
1	梅酒 白竜峠	酸味を抑える女性向	東野リキュー ルール製造所	@ 2500円
2	高越山	渋みが少しあり、酒好きな方向き		@ 2500円
3	紅竜峠	ロゼワインを彷彿させる		@ 2500円
4	梅干 竜峠（小梅）	480g・昔の味、	天野農園	@ 1350円
5	南高梅（大）			@ 1350円
6	ジャム ブルーベリー (100g)	無添加、自然食品。おすすめ	くいな農園	@ 450円

上記のように天地シニア推薦の商品のご斡旋をしています。お申し込みは、メール、またはFAXで 天地シニアまでどうぞ。お申込み金額が4千円以上の場合には送料は天地シニアで負担します。

事 務 局

＜新事務所までの道のり＞

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号
(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

① JR「御徒町駅」東京メトロ日比谷線「中御徒町駅」から12~3分
昭和通り（松坂屋と反対側）を渡り、バス道路をディスカウント・ストア
多慶屋の横を真っ直ぐ7-8分歩く。都営大江戸線『新御徒町』の出口があり、
その直ぐ隣に「佐竹商店街」入り口があります。商店街アーケードを南進して、
南出口を出て直角に右折、約50メートル、道路左側にある薄青いビル
の2階。1階は焼肉屋「もとやま」

② 都営大江戸線「新御徒町駅」A2出口を出て「佐竹商店街」入り口から、
商店街アーケードを南出口へ、約5分。突き当たって右へ、約50メートル先、モスグリーンの3階たてビルの2階。1階は、焼き肉「もと
やま」。

* Yahoo の地図検索 台東区台東2丁目で「双葉ビル」が表示されます。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくださいとすれば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいているのでご了承ください。

<振込先>振込先：三井住友銀行「神田支店」（普通）7871532
(口座名) テンチニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・415号

発行：2015年12月14日

: 天地シニアネットワーク事務局 (津田 穎人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp
URL <http://www5a.biglobe.ne/~tenti/>